

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

朴正米さんを  
グッドプラクティショナーに推薦する理由

社会福祉法人こころの家族は、在日コリアン高齢者の方に故郷の文化がある環境で過ごしていただきたいという、理事長の田内基理氏の強い思いをきっかけに、1989年以來、5つの施設を設立、運営されています。施設には、在日コリアンの方のみならず、日本人の高齢者も共に暮らし、職員として韓国、日本および他のア

ジアの国々の方も多数働かれています。多文化共生社会の構築がめざされる今、「文化」と「こころ」をみつめ、30年以上の実践を積み重ねてきた同法人とその施設の経験から、多くを学びたいと思います。

(推薦者：東京都立大学人文社会学部教授  
和気純子)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

## 私 の 実 践

# 在日コリアンと日本人の共生から 多文化福祉の実践現場へ 「福祉は文化です」

朴 正米 (社会福祉法人「こころの家族」  
「故郷の家・東京」施設長)

## 1. はじめに

故郷の家は1989年、大阪府堺市に日本で初めて在日コリアンのために建てられた老人ホームです。現在は、在日コリアンと日本人の高齢者が共に暮らしています。故郷の家は故郷の家・東京を含めて堺、大阪、神戸、京都にあります。故郷の家・東京は2016年開設された5つ目の施設です。

故郷の家の設立のきっかけは、運営母体となっている社会福祉法人こころの家族で田内基理事長(韓国名:尹基, ソーシャルワーカー, 韓国社会福祉法人共生福祉財団会長)が在日コリアン高齢者問題を提唱したことからです。理事長は、1984年当時高齢化社会であった日本でも見られた高齢者の孤独死の記事の中で在日コリアンの孤独死の記事を読んで在日コリアンのための老人ホームの必要性を感じ始めます。理事長が在日コリアンの高齢者の問題に敏感になった理由の一つとして理事長の母(田内千鶴子)の影響も少なくないと思われます。理事長の母は日本人で、7歳から50年間韓国木浦で暮らしました。彼女は夫(尹致浩)と結婚し、児童養護施設木浦共生園を運営していました。しかし、韓国の6・25南北戦争後、夫は子供たちの食糧を求めるために光州に行ったまま行方不明になってしまいます。それでも彼女は、夫を待ちながら、いつもチマチョゴ

りを着て3000人の韓国の孤児の世話をしました。そして韓国木浦で56才の生を終えましたが、死ぬ前にはいつも使う韓国語ではなく日本語で“梅干しが食べたい”と述べたようです。

その後、理事長は日本の社会福祉法と老人福祉法に基づいた、在日コリアンが老後を故郷の文化がある環境で過ごせる老人ホームを建設したいとの趣旨を朝日新聞に(1984.6.18)寄稿します。理事長の寄稿によって多くの人の関心が集められ、大勢の市民の協力を得て社会福祉法人こころの家族の認可及び大阪府堺市に最初の故郷の家が開所されました。故郷の家は高齢者の孤独死による孤立の問題を代弁し、市民の参加によって問題の解決を模索し、その方法を見出した、市民によって設立された施設とも言えます。当時日本全国から7000件以上の寄付が集められ社会福祉法人こころの家族「故郷の家」が生まれました。

## 2. 文化的多様性を考慮したソーシャルワークの実践

故郷の家は当初在日コリアン高齢者のための老人ホームとして始まりましたが、今は在日コリアンと日本人の高齢者が共に暮らしています。故郷の家は日韓文化があり、韓国人の相談員を配置すると共に、日本人職員には韓国の情の文化を韓国人職員には日本の思いやり文化を教えています。韓国語と日本語、梅干しとキムチ、昼とオンド

ル、演歌とアヒランが共存します。このように多様な文化的背景を持っているご利用者を考慮して、彼らのアイデンティティの回復と、素朴な願いを叶えることを目標としています。また、故郷の家は韓国からの社会福祉研修生を受け入れて在日コリアンのご利用者が韓国文化のある環境の中で楽しく安心して生活できるように各種プログラムを提供してきました。違いを受け止め、文化を保持し、言葉、食事、生活習慣、日韓文化の多様性を尊重した高齢者サービスが故郷の家のソーシャルワークの核心となります。そして故郷の家・東京は日本のユニットケアの良さも加えられご利用者お一人ひとりの生き方を尊重しながら、家庭的な雰囲気の中での個別支援をしています。

在日コリアン高齢者のほとんどは、意思の伝達方法として韓国語と日本語の両方の言語を使います。日本生まれの2世、3世とは会話ができません。韓国語を話すだけで認知症と間違われることもあります。また、第2母国語の日本語を忘れることは、特に認知症の高齢者に多く現れます。言葉は、彼らの人間性を保障するためにも欠かすことができないものです。そして、日本人の高齢者も疎外されないように、共生と和解の理念を何より重要視しています。また、職員とご利用者の家族は日本人であり、地域社会との交流を通して故郷の家は自然に日本人と韓国人の共生が行われる場所となりました。

### 3. 地域社会との交流を通じた福祉文化づくり

多様な文化的背景をもつご利用者と職員、そしてご利用者の家族と地域社会の住民との共生の中で、施設側からも両国の文化を楽しみながら（体験、理解、認め合う）交流できる方法を模索しています。そして始まったのが「コリアン・ジャパンデー」です。「コリアン・ジャパンデー」は5つの故郷の家で行われている文化祭のようなイベントです。最初は日本と韓国の文化を紹介する行事として始まり、2019年に、開設3年を迎えた故郷の家・東京では「コリアン・ジャパンデー」

を「多文化フェスティバル」として名前を変え・拡大して実施しました。その背景にはやはり時代の趨勢とこの地域の多様性があります。2022年現在東京には50万人の外国人が暮らしており、故郷の家・東京が所在する江東区には約3万人近くの外国人が住んでいます。そして、故郷の家・東京には日本人職員を始め韓国、ミャンマー、フィリピン、ベトナム、中国の国籍を持つ外国人介護士が働いています。日本社会も外国人が介護分野で働くことが出来るように介護ビザの創設等外国人介護士を受け入れる体制はすでに始まっており、まさに今の高齢者福祉現場での外国人介護士はいなくてはならない存在です。高齢者介護現場は日本人職員と外国人職員が協働で働く環境へと変わりました。特に、開設時から異文化共生が前提になっていた故郷の家は文化的多様性を受け入れるのにおいて強みがあるかもしれません。

「多文化フェスティバル」では、今までの日韓両国の文化を越えて現在故郷の家で働いている多様な国籍の外国人介護士の国の文化を紹介する場を作っています。ミャンマー職員の伝統舞踊やベトナム職員の手作り料理等を紹介するなど、ご利用者と職員、ご利用者の家族そして地域の住民が多様な背景を持つ隣人への理解と交流ができるようになります。このように故郷の家・東京は文化的背景を考慮したソーシャルワークの実践だけではなく、地域社会にもこの現状を伝える役割を通して福祉文化を作り上げることに力を入れています。今はコロナの影響で制限がありますが、故郷の家・東京には「地域交流スペース」があり、施設の空間を地域社会に開放することによって福祉文化の拠点になることにも心掛けています。また、コロナの前までは毎年「日韓こころの交流」シンポジウム等、国際交流・研修プログラムを通して日本のソーシャルワーク現場を学び・経験する機会を与えてきました。

### 4. おわりに

社会福祉法人こころの家族は故国に帰りたくて

も日本の生活に慣れて帰れない在日コリアンの高齢者たちに、豊かな老後を過ごしていただくための老人ホームをつくることはもちろん、「子どもや障害者のこころの家族となり、その福祉ニーズに応えるプログラムの開発、支援を行います。国境・民族・文化を越えて共に生きる心豊かな社会の構築に寄与し、市民による国際協力の芽を育てる福祉文化の創造を目指します。」こころの家族がこの理念を実現するために、中心におく考え方は「人権の尊重」、「ノーマライゼーション」、「ソーシャルインクルージョン」です。そして、キリスト教精神の福祉です。

法人としては世界の恵まれない子どもたちや障害児（者）の健全な育成と自立を支援することによって能力と可能性を向上させ、地域の中で共に生きていくことのできる豊かな心を育てること、市民福祉のこころを育て、地域社会と世界平和をつないでいくことを目的とし、安心して子どもを生み育てられる社会、違いを受け入れ、助け合う社会、長寿を喜ぶ社会、みんなで参加して共につくる社会、この国に住む外国人が日本は良い国だと言える社会づくりを願っています。

これからの取り組みとして、故郷の家の創立

30周年を記念して各地で地域福祉を計画し、在日コリアンや新定住者（ニューカマー）と地域の日本人を対象に、韓国語・日本語で対応できる専門家によるカウンセリングサービスの実施、また、新しく日本に来た外国人が日本の社会に早く適応するように、相談支援やセミナーなど各種情報提供や質の高いプログラムの提供を行っていきます。

私は韓国生まれで大学までは韓国で音楽を専攻しました。そして日本の大学院へ（武蔵野音大大学院）留学し、イタリアなどでの学びを経て音楽の教鞭をとっていました。声楽家だった私を変えてくれたのが「福祉は文化です」という理事長の一言です。その一言で私は福祉の世界へ転身するようになりました。1998年に故郷の家で生活相談員及び音楽セラピストとして務め、2005年には故郷の家・神戸の施設長、2009年には故郷の家・京都の施設長、2015年には再び故郷の家・神戸施設長、2018年1月から故郷の家・東京の施設長として赴任しています。

これからも福祉文化を通じて多文化の福祉人材の養成や、福祉市民が多く協働できる社会へ寄与できるように努めて参ります。